

フランス語初級教科書における ポライトネスとしての呼称

大塚 陽子

1. はじめに

呼称¹は、呼びかけの際に注意喚起として機能するばかりでなく、話し手と聞き手の対人関係の様相を表す標でもある。呼称が示すのは聞き手である。それゆえ話し手が選択する呼称は、発話時点・場において話し手が聞き手をどのように捉えているかという認識のあらわれとなり、話し手と聞き手のその時点・場における関係を映し出す。さらに呼称は、対人関係を調整するストラテジーとしても使用されることがある。ひとくちに対人関係といってもそのあり方は文化によって異なり、対人関係と密につながる呼称の使用にもまた文化の反映が見られる (Traverso (1999), Kerbrat-Orecchioni (1992), (1994), (2011))。したがって呼称は、学習者が未知の文化を体験する外国語教育という場においても、適切に且つ有効に扱われるべき学習事項であると考える。

本稿では、対人関係調整機能としてのポライトネスの観点から、1952年から2009年にかけてフランスで刊行された8冊のフランス語の初級教科書を対象に、呼称について観察し分析する。フランス語の呼称に関しては、Kerbrat-Orecchioni (2011) による « Formes nominales d'adresse (FNA) » についての分類がある。本稿では、この分類を手掛かりに、分析対象とした教科書で扱われた呼称のタイプとその機能について、フランス語教育で呼称を扱う意味の検討も視野に含めながら考察する。

2. ポライトネスとしての呼称

2.1 呼称の多機能性

呼称とは「対話者に話しかけるために直接的コミュニケーションの中で用いられる辞項²」である。話し手は呼称を用いて聞き手を呼んだり、聞き手に対する認識、場合によっては感情を示したりすることができる。結果として聞き手との関係があらわになる。

(1) L1³ Monsieur, on arrive à Paris à quelle heure ?

L2 On arrive à 16 heures 44, mademoiselle.

(EL⁴ : 16)

L1 の Monsieur は、話しかける際の呼びかけとして用いられている。それと同時に、L1 が L2

を *monsieur* という呼称を用いる対象であると認識した表明ともなっている。L2 はこの発話（質問）を受け応答しているが、発話の最後に *mademoiselle* を付加している。通常、呼びかけであれば、L1 のように発話の冒頭に置くほうが効果的である。また、L2 は L1 に応答しているのであって、敢えて呼びかける必要もない。では、この *mademoiselle* は、どのような意味を持ち、どう機能しているのだろうか。このことを考えるために、この会話についてさらに詳細を見てみたい。

(1) は、電車内での車掌（男性=L2）と乗客（女性=L1）の会話で、発話者同士は初対面、いわば通りすがりの関係である。*monsieur / madame / mademoiselle* は、名前を知らない相手に使える便利な語で、しかも元来は高位にある人物に対して使う呼称であったことから、以前は敬意のニュアンスも含んでいた⁵。初対面の相手に呼びかける語としては使用しやすく、実際によく使用される。*mademoiselle* は名前を知らない未婚（と考えられる若い）女性に使える呼称で、敬意を表すレベルとしては *monsieur* と同じ価値をもつととらえてよい。

会話とは、会話の参加者たちが相互作用的に構築していくものである。Spencer-Oatey (2000) は、会話の参加者たちが通常「相互作用的な結合と分離（人とどのような関係を持つか、そしてどのくらい深くかかわるかという問題）」を意識しながら会話を構築していることを指摘している⁶。こうした意識に関わるのが、距離（親疎関係）と力（上下関係）(Brown & Levinson (1978 /1987⁷), Kerbrat-Orecchioni (1992), Spencer-Oatey (2002) etc.)である。距離の観点から L1 と L2 を見れば、両者は初対面、親疎でいえば「疎」の関係にある。互いの名前も知らず、知る必要もない。ゆえに L1 は名前を知らない相手に用いることのできる *monsieur* を L2 に対し使ったと考えられる。次に力の観点からはどうだろうか。既に触れたように *monsieur* は、敬意のニュアンスをやや含む語である。L1 が L2 を *monsieur* と呼んだ時点で、この語が含む敬意のニュアンス分、L2 の立場が L1 より上になる。通常、車掌と乗客の間に（フランスでは）特別な上下関係はない。不必要な不均衡は対人関係に好ましくない影響を与える⁸ので、起こった差は是正されねばならない。*mademoiselle* が付加されれば、*monsieur* によってもたらされた不均衡を調整することができ、より適切な距離感、平等な力関係が示されることになる。*mademoiselle* は、呼びかけというよりもむしろ、関係調整として機能しているのではないだろうか。

私たちが他者とことばを交わすとき、対人関係と言語のこうした事情から生じた産物を意識的にせよ、無意識的にせよ、多く使用している。たとえば日本語の敬語のような儀礼化された言語表現はそのひとつの例であるが、呼称の使用も間違いなくそれにあたる。滝浦 (2008) が、呼称が「人間関係の距離感を敏感に反映すること、その距離感には人間関係を分ける尺度がかかわっていること⁹」を指摘したとおり、話し手と聞き手の関係を「敏感に反映する」呼称は、対人関係に密につながり、ときに関係を調整する機能を発揮するのである。

2.2 ポライトネスと呼称

(2) *Apporte-moi à boire.*

(3) *Apporte-moi à boire mon chou.*

(Kerbrat-Orecchioni 1996 : 58)

(2) (3)はいずれも聞き手に「飲み物をもってくるようにうながす」発話であり、命令法が用いられている。(2) (3)の話し手は聞き手に対し *tu* を用いることができる立場¹⁰にあることがわかるが、(3)には、通常ごく親しい間柄でしか使われない呼称 *mon chou*¹¹が付加されていることから、話し手と聞き手の間に親愛感情を示すことができるほどの親密さが見て取れる。では、この *mon chou* が付加されるメカニズムとはどのようなものだろうか。

ポライトネス研究の基盤でもある Brown & Levinson (以下 B & L と略記) (1978 / 1987) によれば、「命令」は聞き手のネガティブ・フェイス (以下 NF と略記) を侵害する行為にあたる。フェイスとは社会生活をいとなむすべての人がもつ基本的欲求¹²で、「自分の行動やテリトリーを他者から邪魔されたくない¹³」という欲求の NF と、「他者にとって自分のイメージが好ましいものであってほしい¹⁴」という欲求のポジティブ・フェイス (以下 PF と略記) がある。人はみなフェイスを守りたいが、実際にはさまざまな言語行為によって脅かされる。こうした言語行為を B & L は「フェイスを脅かす行為 (Face-threatening act 以下 FTA と略す)」とした。ある言語行為のフェイス侵害の度合い (Weightiness (W)) は、話し手 (Speaker (S)) と聞き手 (Hearer (H)) の社会的・心理的距離 (Distance (D))、聞き手が話し手に対して持つ力 (Power (P))、ある文化 (x) においてその行為が聞き手にかける負担の大きさ (Ranking (R)) から見積られる¹⁵。B & L は、ある言語行為を行う場合、他者のフェイスをできるだけ侵害しないよう配慮することが対人関係の構築や保持には必要であるとし、フェイス侵害の度合いに合わせ、話し手は聞き手に対し言語を用いたなんらかの配慮を払うとした。この配慮がポライトネスである。実際には、この配慮はさまざまな言語行動となってあらわれ、それは対人関係調整のストラテジーとなる。聞き手の NF に働きかけるネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (以下 NPS と略す) と、聞き手の PF に働きかけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー (以下 PPS と略す)、また聞き手に判断をゆだねるオフレコード・ストラテジーがある¹⁶。

先にふれた「命令」は、聞き手の行動を強制するため、聞き手の NF を大いに侵害する。聞き手との関係を保ちたい話し手は、聞き手のフェイス侵害の度合いを軽減するためのなんらかの方策をとる。なんの方策もとられていない(2)は、FTA があからさまに行われ¹⁷、かなりぶしつけな印象を聞き手に与えることになる。話し手が聞き手より優位な立場にある、話し手と聞き手がぶしつけさも気にならないほどの近親関係にある、あるいは望む行為が聞き手にとって負担にならないことがはっきりしている、といった背景があれば、あからさまな FTA が行われるのであるが、通常はなんらかの方策がとられる。方策がとられた場合の一例が次である。

(4) Apporte-moi à boire, s'il te plaît.

s'il te plaît は定型句化した緩和表現で、NPS として機能する。この表現が加わることで、直接的な要求が間接的になり、フェイス侵害の度合いが軽減されるのである。

これに対し(3)では、*mon chou* が PPS として機能している。この呼称の使用から、話し手が聞き手を *mon chou* と呼べるような親愛感情の対象と見なしているということが明確になり、それが聞き手にも伝わる。これにより「他者によく思われたい」という聞き手の PF が満たされ¹⁸、フェイス侵害度が軽減されるのである。こうした呼称の使用は、B & L が提示する第 4 の

PPS「仲間内であることを示す標識を用いよ¹⁹」に含まれる。滝浦（2008：78）は、「文化人類学的に見れば、人を呼ぶことは声で間接的に相手に“触れる”ことであり、基本的なタブーに抵触する側面をもつ」一方で、「相手ととくに親しい関係にある場合には、こうしたタブー的な動機づけは反転し、むしろ相手の“人”をじかに呼び、相手の内面に踏み込んでゆくような呼称となる。これは、相手の領域に踏み込んでも人間関係は損なわれない——そのくらい二人の間には隔てがない——という含みの、共感的呼称」であると述べている。

ただし、呼称の使用には注意が必要である。話し手と聞き手の関係に適さない呼称の使用は、逆に聞き手のPFを脅かす。B & L (1978/1987: 68) は、「初対面での、呼称その他の地位を表す帰属確認の使用」により、聞き手のPFが脅かされる可能性を指摘している。初対面でも、聞き手が話し手のことを、話し手が考えるほど親しい関係だと認識していない場合には、共感的呼称である *mon chou* は、聞き手のフェイスを脅かし、話し手と聞き手との関係によくない影響を与えることになる。

このように、呼称は対人関係に深く結びついており、呼称を含んだ発話は対人関係を左右する。各言語にはさまざまな種類の呼称があり、円滑なコミュニケーションをすすめるうえでは、その使用に注意が必要なのである。

2.3 フランス語の呼称 —Kerbrat-Orecchioni (2011) による—

では、フランス語の呼称にはどのようなものがあるだろうか。Kerbrat-Orecchioni (2011) は、Perret (1968, 1970)、Braun (1988) らを参照した上で、呼称を総称する « Formes nominales d'adresse (FNA) » という用語を提案し、フランス語の呼称を分類しているの、以下にまとめておく（必要に応じ主な訳のみを付す）。

◆ 代名詞 二人称の人称代名詞 *tu / vous*

◆ 名詞

① 人称名詞²⁰ (姓、名、愛称、あだ名など)

② *monsieur / madame / mademoiselle* : かつては称号のひとつでもあったが、現在はその価値をほぼ失い、近親関係にない相手「誰にでも使える」語。

③ 称号²¹ (貴族の称号、授与された称号等) : *capitaine* (大尉・船長等)、*chef* (ボス・軍曹・シェフ等)、*patron* (親方・社長等)、*[cher] Maitre, Maitresse* (先生等) etc. 称号は「名誉」という価値を含む。*Votre Excellence* (閣下・猊下)、*Votre Honneur* (閣下) etc.

④との区別が難しく、コンテクストによっては *Président* (大統領、会長等)、*Docteur* (ドクター)、*Professeur* (教授) も含まれる²²。

④ 職務や役目を示す名詞²³ : *taxi* (タクシー)、*chauffeur* (運転手)、*garçon [de café]* (ボーイ)、(工事現場で) *serrurier* (錠前職人)、*électricien* (電気技師)、*maçon* (左官職人)、(刑務所で) *surveillant* (監視人)、*détenu* (囚人)。

⑤ 関係を示す語²⁴ :

- ・ 家族関係 : *maman, oncle, tonton* (おじちゃん)、*cousin, frangin* (くだけた言い方で兄弟)、*[mon] frère* etc.

- ・ 友愛関係：[chers] amis、amigos ((スペイン語) から友)、camarade (仲間)、mon pote (仲よしの友だち) etc.
- ・ 仕事関係、その他：[cher] collègue (同僚)、[cher] confrère (同業者)、[mes chers] compatriotes (同国人)、[salut] voisin! (ご近所さん・同胞) etc.

⑥ ラベル²⁵ (タイプ別・レッテル) :

- ・ 年齢性別などによる：[salut] mec (野郎)、mon gars (少年)、jeune homme (若者)、集散的に [salut] les jeunes (若者たち)、les filles (女の子たち)、les gars (男の子たち)、les gones (リヨン地方のくだけた表現で子どもたち) etc.
- ・ 際立った特徴による：la blonde (金髪)、le pull vert (緑のセーター)、la casquette (庇付き帽子)、la clope (巻きたばこ)、vous là-bas avec le sac en plastique (ビニール袋を持ったそのあなた) etc.

⑦ 情意語²⁶ :

- ・ ネガティブな意味：Ducon (どあほう)、[Salut] connard (間抜け) etc.
- ・ ポジティブな意味：ma belle (別嬪さん)、ma beauté (美しいひと)、mon petit / ma petite (おちびちゃん)、mon grand / ma grande (子どもに対してお兄ちゃん、お姉ちゃん)、mon vieux / ma vieille (年齢に関係なく親しい相手に)、mon ange (天使)、mon chou、mon trésor (宝物)、chéri(e)、bébé (ベイビー)、mon lapin (ウサギの意：かわいこちゃん)、ma puce (ノミの意：おちびちゃん)、poupoule (雛の意：かわいこちゃん) etc.²⁷

(Kerbrat-Orecchioni 2011: 13-14, 18-19)

これらの呼称は、単独で使われるもの、単独ではなくほかの表現との組み合わせで使われるもの、またある社会グループでのみ使われるものなどがあり、組み合わせや使用の場によってさまざまなニュアンスを帯び、対人関係に作用するのである。

2.4 呼称の機能

呼称について Kerbrat-Orecchioni は、1)対人関係の組織と運営機能、2)対話者の関係や言語行為を強調する機能、3)対人関係そのものに関わる機能²⁸があることを示している。

1)は呼びかけたりや会話の順番を聞き手に与える機能で、具体的には発話の際の導入と聞き手の明示がそれにあたる。2)の強調の機能には、発話のインパクトを強調する役割(レトリックの頓呼法のように、発話の途中であらわれ、聞き手の注意を喚起し、発話自体のインパクトを高める)と言語行為自体を強調する役割がある。言語行為の強調という点について、次の例を見てみたい。

- (5) Bonjour, **maman**.
- (6) Salut **Pierre**.
- (7) Merci, **Jean**.

いずれも呼称をつけない発話 *Bonjour. Salut. Merci.* が可能だが、呼称をつけるとよりよい（丁寧な、心がこもった）印象を与えられると考えられている。これについて Kerbrat-Orecchioni は、「フェイスを立てる行為（Face flattering act 略して FFA）」を用い解説している。FFA とは、B & L (1978/1987) を補足するために Kerbrat-Orecchioni (1992, 2005) によって導入された概念である。言語行為の多くは FTA であるが、FTA でない行為もある。たとえば「挨拶」や「感謝」は、聞き手の PF を立てる FFA である。この FFA に呼称が組み合わされるとことは、「この FFA は [あなた] に向けられている行為である」ということが明示されることを意味する。そしてそのことが、本来 FFA である言語行為の価値を一層強調することになり、聞き手により印象を与えるという結果を導き出す。

一方、呼称がつくことで、その行為の実行者（聞き手）が明確になり、聞き手への強制度が高まることもある。

(8) *J'ai soif !*

(9) *Papa, j'ai soif !*

(Kerbrat-Orecchioni 2011 : 28)

(10) *La porte est ouverte !*

(11) *La porte est ouverte Pierre !*

(Kerbrat-Orecchioni 2011 : 28)

(8)は「喉が渴いた」という事実を述べる発話だが、*Papa* という呼称がつくことで(9)は父親に対する要求（「飲み物をくれ」）になる。また(10)は、「ドアが開いている」という事実を述べる発話だが、呼称が付加した(11)は *Pierre* に対する要求（「ドアを閉めろ」）になる²⁹。

3)の対人関係そのものに関わる機能とは、関係性を明示することで、（よくもわるくも）相手のフェイスに働きかけ、対人関係を調整するものである。既に見たように、聞き手に対する親疎、話し手と聞き手の力関係に加え、聞き手に合意しているか、敵対しているかといったことなども呼称によって示すことができる。親しい相手には名（*prénom*）や愛称、親愛感情を示す語が用いられ、連帯感を示すのは、仲間意識を表す語やインフォーマルな印象を与える語（*mon pote* など）である。一方、力関係は、上下関係を示す呼称、敬意を表す称号などで示すことができ、*Docteur*（上）/ *Hélène*（下）や *Monsieur*（上）/ *Pierre*（下）というように、非対称的なありようが見られる。また、好ましくないと思う相手には、相手が不快に思う呼称を使用することで、相手との距離を調整できる。

通常、1つの呼称はこれらの機能を併せもつ。以上を踏まえ、次章では分析対象の教科書でどのような呼称が扱われているのかを観察し、分析をこころみる。

3. 観察と分析

3.1 分析対象

分析対象として選択した教科書は以下の8冊である。

- *Cours de langue et de civilisation françaises 1* 通称 *Mauger Bleu*³⁰ （以下 MB）
- *La France en direct 1* 通称 *Capelle* （以下 FED）

- *De vive voix* (以下 DVV)
- *C'est le printemps 1* (以下 CP)
- *Sans frontières 1* (以下 SF)
- *Entrée libre 1* (以下 EL)
- *Alter ego 1* (以下 AE)
- *Le nouveau taxi ! 1* (以下 NT)

いずれも成人用、初級者向けの教科書で、各時代においてよく使用された（されている）ものである。各教科書の刊行年、出版社、著者、基盤となる教授法は以下のとおりである。

教科書	出版年	出版社	著者	教授法
MB	1953	Hachette	G. Mauger, M. Bruézière <i>et al.</i>	伝統的・直接教授法
FED	1969	Hachette	J. Capelle, G. Capelle <i>et al.</i>	視聴覚法
DVV	1972	Didier	M.-T. Moget <i>et al.</i> (CREDIF ³¹)	視聴覚法
CP	1981	Clé Internationale	J. Montredon, G. Calbris <i>et al.</i>	視聴覚法
SF	1982	Clé Internationale	M. Verdelhan, M. Verdelhan <i>et al.</i>	コミュニケーションアプローチ
EL	1983	Clé Internationale	M.-T. Bréant, P. Davoust <i>et al.</i>	コミュニケーションアプローチ
AE	2006	Hachette	A. Berthet, C. Hugot <i>et al.</i>	行動中心アプローチ
NT	2009	Hachette	G. Cappelle, R. Menand	行動中心アプローチ

(AE、NT以外の教授法については、Cuq & Gruca (2002) を参照した)

各教科書は、各教授法に基づいて作成されているので、それぞれの方針に沿った構成になっているが、どの教科書にもダイアログ (dialogue)³² 部があり、その学習が各課の中心に据えられている。したがって本稿では、このダイアログ部で扱われている呼称を取り出し観察を行うことにする。

3.2 方法

各教科書のダイアログ部から呼称を抽出し、2.3 にしたがって分類する。その中から、ポライトネスとして機能するもの、逆にインポライトネスとして機能する可能性があるものについても記述し、分析を行う。

3.3 観察

3.3.1 代名詞

Brown & Gilman (1960) は、二人称の人称代名詞 *tu/vous* (T/V) の使い分けについて、対話者間に *solidarity* (連帯=横) の関係がある場合は、T は T、V は V と対称的に用いられ、*power* (力=上下・縦) の関係がある場合には、V と T といった非対称的な使用になることを示している。この点について言えば、分析対象としたどの教科書にも、V と T といったような不均衡な関係は見られなかった。

ただ、*tu/vous* の使い分けについては、教科書によって差が見られた。MB では、夫婦間、親しい友人間でも *vouvoient* (*vous* の使用) が見られた。また、医者と7歳の子どもの会話でも *vouvoient* であり、現在とは幾分異なる距離感を観察することとなった。DVV でも、出会ってから月日が経ちかなり親しくなったという設定の異性の友人同士も *vouvoient* をして

いる。このあたりは、刊行当時の社会における言語の使用や規範の様子がかなり反映されていると考えられよう。

ポライトネスに関する点としては、vouvoiment から tutoiement (tu の使用) への変更についてのやりとりが観察された。

(12) — On se dit «tu» ?

— Oui, d'accord.

— Tu habites ici à Évry ?

(SF: 41)

これは、フランス語が横関係の釣合を重視する言語であることのあらわれでもある。tu に切り替えることに対し、相手の了解を得る。勝手に一方が tu で話すことは、均衡を崩すことになり関係に影響がでる³³。上下関係がことばの端々にあらわれ、それが当然とされる日本語を母語とする学習者は、こうした点を学習の早期段階に意識しておく必要がある。

3.3.2 名詞

3.3.2.1 人称名詞

人称名詞としては、「姓」、「名」、「名・姓」の組み合わせが観察され、愛称やあだ名の明示はなかった。呼称としての人称名詞の使用は全体の呼称使用の約34.4%であった。

3.3.2.1.1 「名 (ファーストネーム)」

「名」を呼ぶことは「姓」で呼ぶことより親近感を表す。したがって、「名」で呼ぶことはすでにある種の PPS であると考えられることができる。さらに、「名で呼んでいい」という許可、「名で呼び合おう」という提案を行うことは、相手と近づきたいという意思表示になり、相手の PF に働きかけるとりわけポライトな行為になる。

(13) — Enchantée de faire votre connaissance, **Monsieur Morin.**

— Vous pouvez m'appeler **Jacques.**

— Alors, appelez-moi **Michèle.**

(SF: 135)

「名」の呼称は全教科書で見られ、友人、兄弟、夫婦間という設定で使用されていた。ただ、MB では夫が妻に対してと、子どもに対する使用のみが確認された。MB では、友人を呼ぶときには「名」ではなく、Cher(s) ami(s) などが用いられている。これは、MB の出版年が1952年で、また主人公の家族がブルジョワ層である (父親がジャーナリスト) といった、時代的、社会的背景が影響していると考えられよう。全教科書の中で扱われた呼称としての人称名詞の中で「名」の使用は約97%であった。

3.3.2.1.2 「名・姓 (敬称なしのフルネーム)」

敬称なしの「名・姓」の呼称は3つの教科書で確認された (CP, EL, AE)。「名・姓」は、テ

レビ番組やラジオ番組でのやりとりにおいてはよくある使用で、Kerbrat-Orecchioni (2011) も「名・姓」の使用が「報道の呼称³⁴」であるとしている。(14) (15)は番組の設定での会話である。

(14) Agnès Ruhlman, parlons de vos souvenirs. J'ai quelques questions pour vous.
(AE: 98)

(15) Bonjour, Florence Bernazzi, bonjour, François Cosprec. La première chose peut-être à expliquer à nos auditeurs, c'est pourquoi vous avez quitté la ville. Florence ?
(AE: 148)

敬称なしの「名・姓」の使用は日本であればきわめてインポライトになる恐れがある。しかしフランスでのこの現象を、報道という場においてはメッセージ伝達の正確性が最重視されるということのあらわれと考えたい。実際にやりとりをしているいわば聞き手1に加え、視聴者(auditeurs)である聞き手2の存在がある。正確性は、聞き手2に向けて示さなければならない。したがって目前の人間関係より、むしろメッセージの正しい伝達が重視されるのである。

これに関連する別の例も見られた。(16)は電話での会話で、敬称なしの「名・姓」の呼称使用の例であるが、メッセージの正確な伝達を優先した結果だとすれば理解ができる。確認の後には、monsieur+「姓」の呼称があらわれていることから、「名・姓」の呼称の使用領域は限定されていると考えてよいだろう。

(16) — Allô ? 707.54.15 ? Jacques Martineau ?
— Oui,
— Bonjour, monsieur Martineau. (SF: 13)

同様に電話の会話で敬称なしの「姓」のみという例も1件あった(MB)。これも本人であるかの確認(情報の正確性)が優先されたものといえるだろう。

3.3.2.2 monsieur/madame/mademoiselle (以下 M/Mme/Mlle と略す)

これらの語の性質については2.1で確認したが、教科書内では単独でも、人称名詞や名詞と組み合わせられた形でも、呼称として非常によく観察された(全体のうちの約48.9%)。

3.3.2.2.1 単独での使用

単独での使用は、①知らない人に、②ある地位の人に(教師など)、③店員や職務に就く人に、④客に向けられた使用が観察された。呼びかけとしての使用も多いが、言語行為との組み合わせ、とくに「挨拶」「感謝」「応答」「提示」や、声かけのpardonと共起していることが多いことがわかった。単独での使用はM/Mme/Mlle使用のうちの約89%である。

3.3.2.2.2 人称名詞との組み合わせ

単独での使用に比べ、人称名詞との組み合わせはM/Mme/Mlle使用のうちの約11%にとどまっ

た。「姓」との組み合わせが多く、「名・姓」との組み合わせが2件のみ（MB：結婚式で、市長が新郎新婦に誓いのことばを確認する際の呼びかけ）で、「名」との組み合わせはなかった。実際、「名」との組み合わせはきわめて限られた関係や状況のもとでのみ使用されるので、この結果は当然ともいえる。呼びかけの機能以外では「挨拶」と組み合わせられるケースが目立った。

(17) — Bonjour Madame Renault.

— Bonjour Madame Legrand.

(EL: 14)

M/Mme/Mlle に姓がつくと、聞き手が個別化されることから、知り合いと挨拶を交わすという仲間意識のニュアンスを伝えられる。教科書内でも、近所の住人同士やアパートマンの管理人と住人の会話、商店での会話（店員からなじみ客へ）で使用が観察された。

3.3.2.3 称号

称号は本質的に敬意のニュアンスを含む。したがって使用するだけで、聞き手の PF を立てることになる。使用割合は低く呼称全体の約 3%にとどまり、Docteur (MB, FED, DVV)、Monsieur le proviseur (MB)、Monsieur le directeur (DVV)、Monsieur l'agent (SF) のみが認められた。2000年以降に出版された教科書では見当たらなかった。

(18) — Bonjour, docteur.

— Bonjour, madame.

(MB: 182)

3.3.2.4 職務や役目を示す名詞

教科書では、chauffeur (MB)、garçon (MB, DVV, EL)、taxi (DVV) が観察された（全体の約 1%）。いずれも発話の冒頭で呼びかけとして使用されている。通常(20)のような使用はまずないことから、これらはむしろ「呼ぶ」ためにしか使えない呼称であるといえよう。最近では chauffeur や garçon は使われず、monsieur が代用される傾向にある。目的達成（タクシーをつかまえる、注文をする）が優先される状況から、職務に就く人の人間性への配慮が優先される状況へと変化しているあらわれであろう。

(19) — **Garçon**, l'addition, s'il vous plaît.

(MB: 94)

(20) — ?? Merci, garçon.

3.3.2.5 関係を示す語

3.3.2.5.1 家族関係

家族関係を示す語としては、papa/maman (MB, FED, DVV, SF, EL)、mon/mes enfant/s (MB)、grand-mère (DVV)、cher/chère+papa/maman (AE)、電話での Tante+「名」(AE) が観察された（全体の約 6%）。「挨拶」「感謝」「同意」「応答」「命令」「祈願」「評価」といった言語行為とともにあらわれていた。

3.3.2.5.2 友愛関係

MB で chers amis などの使用があった。また FED では Bonjour mes amis. があったが、これはラジオの聴取者に向けてである。これ以外では見られず、友愛関係を示す呼称は、全体使用の 2% のみであった。友人を呼ぶときには「名」を呼ぶ。これが MB 以降の教科書の基本のようである。

3.3.2.5.3 仕事、その他の関係

Patron (CP) と同僚に対する tout le monde (SF)、chers clients のみが観察された。chers clients は店舗内で閉店時間を告げるアナウンスの冒頭で使用されていた。

㉑) Chers clients, votre magasin ferme ses portes dans dix minutes. (AE: 66)

㉒) ?? Clients, votre magasin ferme ses portes dans dix minutes.

clients は chers との組み合わせで呼称として成立する語である。この場合、親愛感情を示す形容詞 cher は PPS として使用されている。閉店という買い物中の客にとっては迷惑な事態を和らげる効果をねらったものであろう。

3.3.2.6 ラベル

jeune homme (FED, AE)、les jeunes (SF)、les enfants (DVV, SF, EL)、les filles (AE) が認められた。㉓) は職場での同僚に向けた発話、㉔) は街頭インタビューでのインタビューによる質問である。

㉓) Alors, dites-moi, les filles, vous allez où pendant les vacances ? (NT: 82)

㉔) Bien ! Et vous, jeune homme ? (AE: 34)

これらの呼称がうちとけた雰囲気醸し出し、仲間意識や若者意識に働きかけ、話しやすい環境を生み出していると考えられる (全体の約 2%)。

3.3.2.7 情意語

情意語には親愛の念を表す形容詞付の呼称も含めたい。親愛の念を表す形容詞として、教科書内では、cher (AE, NT)、petit (MB)、pauvre (DVV) が観察された。具体的には、cher+「名」(AE, NT)、cher+M/Mme/Mlle (MB) などである。cher+「名」については、2000 年以降出版の教科書に多く見られるが、これは、コミュニケーションのタイプが影響している。カードやハガキに加えメールや SMS の使用が普及し、教科書にもこのタイプのコミュニケーションが題材として取り上げられている。こうしたコミュニケーション開始の際に、これらの呼称が用いられていることがあるが、口頭のやりとりでは 3.3.2.5.2 と 3.3.2.5.3 で確認したもののみだったことを記しておく。

petit に関しては ma petite+「名」、petite+「名」(いずれも MB)、pauvre については、ma pauvre+「名」(DVV) が見られた。

その他の親愛のニュアンスを含む呼称としては、mon chéri / ma chérie (MB, SF)、ma vieille (SF) などがあつた。㉔は、娘からの要求を退けたことに対する親近の情に頼る修復行為 (PPS) の例とってよいだろう。情意語の使用は全体の約 2%であつた。

㉔ — Maman, je veux la chambre qui a un lavabo.

— Ah non, ma vieille ! C'est ma chambre, je la garde. (SF : 128)

なお、ネガティブな情意語の使用は、いずれの教科書にも観察されなかつた。

3.3.3 言語行為と呼称

3.3.3.1 FFA と呼称

これまで見た呼称は、発話の冒頭で呼びかけとして用いられるほかに、さまざまな言語行為との組み合わせが確認できた。呼称と共に観察された FFA としての言語行為には、「挨拶」、「感謝」、「感謝に対する応答」、「祈願・祝意」、「賞賛」があつた。

㉕ — Bonsoir, Pierre.

— Bonsoir, Mireille. (DVV : 66)

㉖ Merci, grand-mère. (DVV : 63)

㉗ Bon anniversaire, Mireille ! (DVV : 59)

㉘ — Tu as une jolie robe, Martine.

— C'est vrai ! (DVV : 81)

3.3.3.2 « Pardon » +呼称

話しかけの pardon は、M/Mme/Mlle と共に使用されることが多い。

㉙ Pardon, messieurs, c'est pour le magazine Citémag. Vous avez un endroit préféré dans votre quartier ? (AE : 34)

㉚ — Pardon monsieur, je peux vous demander un renseignement ?

— Bien sûr. (SF : 71)

pardon は「謝罪」のニュアンスを含むが、「謝罪」はおかしてしまった FTA に対する修復行為で NPS にあたる。「謝罪」に呼称が付加されると、FFA への付加の際と同様、「謝罪」という言語行為が強調され、より心がこもった印象を与えると考えられる。

3.3.3.3 「応答」+呼称

「応答」の後にも呼称はよく観察される。MB や DVV では、Oui, monsieur. Non, madame.

といういわば儀礼的と感じられる応答が多く観察された。とくに、店員が客に対して、また生徒が教師に対して応答するとき、M/Mme/Mlle を付加するケースが多く見られた。上下関係のあらわれともとらえられる。しかし、2000年以降出版の教科書ではこうした呼称は見られなくなっている。

3.3.3.4 FTA+呼称

FFA が呼称によって強調されたように、FTA も呼称によって強調される。

- | | |
|--|-----------|
| (32) Excusez-moi, madame , il est interdit de fumer dans le restaurant. | (NT : 66) |
| (33) Madame , s'il vous plaît ! Ne fumez pas ici ! | (NT : 66) |
| (34) Passe-moi une fourchette, Marie-Claude ! | (SF : 95) |
| (35) Arrête, Luc . Ne mange pas trop vite. | (SF : 95) |

いずれも呼称があることで、聞き手にとっては FTA である「禁止」や「要求」の先が聞き手に限定され、聞き手への強制の効力が増す。呼称は、聞き手への配慮ではなく、話し手の意図を達成するために機能したといえる。

一方、仲間意識を高めることのできるレベルの呼称や、情意語の呼称はどの教科書でもほとんど扱われておらず、したがって侵害の度合いを下げるような働きをする呼称の例を 2 例以外には確認することができなかった。

3.4 呼称をどう扱うか

分析対象とした教科書には Kerbrat-Orecchioni (2011) が提示したカテゴリーの各タイプの呼称が観察された(資料 1 を参照されたい)。どの教科書においても観察されたのは「名」と M/Mme/Mlle であった。この「近」と「疎」を表す代表的な 2 種類の呼称だけでも、各言語行為と合わせてさまざまなニュアンスを出すことができる。これらを整理し使いこなせるようにするだけで、コミュニケーションの幅がずいぶんと広がるのが予想される。

語彙レベル・意味レベルの理解だけで終わってしまいがちな呼称の学習だが、呼称の使用とその効果といった語用論レベルからの理解の機会をもつことは、呼称が対人関係と密につながっているということからも、きわめて重要であると思われる。呼称をいかに提示し、いかに理解をうながすかという点については、引き続き検討すべき課題である。

4. まとめ

以上のように、1952年から2009年までに出版されたフランス語の教科書 8 冊における呼称について観察をした。

フランス語にはさまざまな呼称があること、また呼称は聞き手をただ呼ぶための語ではなく、話し手と聞き手の対人関係の距離感や力関係を表すものであること、またこうした性質によって、対人関係を調整するために機能することを確認した。分析対象とした教科書ではさまざまな呼称

が観察された。中でも「名」と M/Mme/Mlle の使用割合が非常に高く、さまざまな言語行為と共に用いられていることがわかった。また日本語にはまず見られない敬称なしの「名・姓」や、FFA と結びついて対人関係に働きかける呼称なども見られた。一方、日本語では親近関係にある話者間でよく使用される愛称やあだ名の使用はなかった。さらに、FTA の侵害度を下げる効果をもつ情意語や友愛関係の語が FTA と共に使用されるような例もほとんど見られなかった。呼称は、聞き手に対する話し手の距離の取り方をあらわにするものである。したがって使用を一步間違えると、聞き手のフェイスを侵害する結果を招きかねない。とくに、情意語や友愛関係の語はこうした意味においても使用に注意が必要だと考えられる。初級教科書ゆえに敢えて扱わないという選択もあるかもしれない。

また、tu で呼び合うきっかけを与えるやりとりや、自分のことを「～と呼んでほしい」という提案は、異文化理解という観点からも日本語母語話者は積極的に学習すべき事項だろう。多くの日本語母語話者の「名」や「姓」は、フランス語母語話者にはなじみのないもので、聞き取りにくかったり発音しにくかったりするが、愛称の使用がこうした問題を解決してくれることもある。呼称の重要性を念頭におけば、こうした「提案」は日本語母語話者にとって有用な PPS 表現となり得る。さらに言えば、学習表現の「提案」「同意」という言語行為を呼称にまつわるものにするだけで、ポライトネスの理解へと発展させることも可能なのである。呼称は、対人関係と密接に結びついているがゆえに、対人関係という文化の基盤を知るためのきっかけにもなり得る。横の関係を重視するといわれるフランスと、縦社会が基本であるといわれる日本の文化比較や異文化理解を、呼称の学習や観察が可能にするのである。

本稿では、各教科書や教授法による呼称の扱いの相違や、文化理解の面から日本語母語話者が直面する問題については扱うことはできなかった。これらについては、その他のポライトネス現象の扱いについての観察とも合わせて分析を継続していきたい。

注

1. formes d'adresse, termes d'adresse, appellatifs [仏]、address form [英]、日本語では「呼びかけ詞」とよばれることもある。
2. cf. 『ラールス言語学用語辞典』の「呼びかけ詞」の項
3. L は locuteur (話し手) を示す。
4. 後述する教科書 *Entrée Libre* の略。
5. *Trésor de la langue française* によれば、monsieur の語源 « monsor » は、やや位が高い (un peu élevé) 男性に対する敬称であった (13世紀)。また15世紀にはなんらかの重要な地位にある男性に対する敬称となった。
6. cf. 『異文化理解の語用論』(2004: 15) = Spencer-Oatey (2002)
7. 初版1978、改訂版1987、ただし本稿は参考文献として改訂版を用いた。
8. cf. Kerbrat-Orecchioni (1992) の第1章 « La relation interpersonnelle »
9. cf. 滝浦 (2008: 78)
10. 動詞 *apporte* が二人称単数 (tu) に対する命令形であることによる。
11. 「ねえ、あなた (おまえ)」*chou* はキャベツの意。
12. cf. B&L (1987: 62)
13. *idem*.
14. *idem*

15. フェイス侵害行為の見積もりの計算式： $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$
16. B & L は、ポライトネスとはあらゆる文化、社会にもみられる普遍的な現象であるが、どのストラテジーが重視され有効であるかは、各文化、各社会によるとしている。B & L が示したのは35の具体的なストラテジーである。詳細は B & L (1978/1987) を参照されたい。
17. “FTA on record” (B & L 1978/1987 : 60)
18. ただし、聞き手が相手のことを話し手と同様にとらえていなければ、当然この mon chou は聞き手のネガティブ・フェイスを脅かすFTAとなる。
19. cf. B & L (1978/1987 : 107-112)
20. les noms personnels
21. les titres
22. Kerbrat-Orecchioni は « professeur », や « docteur » などの語を③に組み入れるべきか、④に組み入れるべきかは、話し手・聞き手の関係性やコンテキストによるとしている。
23. les noms de métier et de fonction
24. les termes relationnels
25. les labels
26. les termes affectifs
27. これらの語はメタファーや動物に関する語が多い (Kerbrat-Orecchioni 2011)。
28. 1) Rôle dans l'organisation et la gestion de l'interaction, 2) Les FNA comme procédés de renforcement du lien interlocutif et de l'acte de langage, 3) Rôle par rapport à la relation interpersonnelle
29. cf. Austin (1970)
30. Mauger は著者の名字、Bleu は本の装丁色が青だったことからこの名がついた。1971年に刊行された *Le français et la vie* は装丁色が赤だったことから *Mauger rouge* と呼ばれる。
31. Centre de Recherche et d'Étude pour la Diffusion du Français
32. 各教科書のダイアログ部とは具体的に以下のとおりである。
 MB : 各課の本文中の対話記述、数課ごとにある EXERCICES 内の DIALOGUE
 FED : 各課はじめの 2 ページの画像付ダイアログ
 DVV : livre de l'élève の画像に対応するダイアログ
 CP : 各 Unité didactique 内の Dialogue A, Dialogue B, Images complémentaires の Dialogue A と B, Dialogue d'appui
 SF : 各セクションの冒頭のダイアログ
 EL : 各課のダイアログ
 AE : 各課 Dialogue (ヘッドホンのマークがついているダイアログ)
 NT : 各課上部の写真が画像に対応するダイアログ
33. もちろん、このように合意をとらなくても自然に tu に変更することもある。
34. cf. Kerbrat-Orecchioni (2011 : 347)

参考文献

- Austin L. (1970) : *Quand dire, c'est faire.*, Seuil.
- Braun F. (1988) : *Terms of address, Problems of Patterns and Usage in various Languages and Culture*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Brown P. & S. C. Levinson (1978/1987) : *Politeness, Some Universals in Language Usage*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Brown R.W. & A. Gilman (1960) : “The pronouns of power and solidarity”. In Sebeok T.A. (éds.), *Style in Language*. Cambridge, MIT Press, 235-276.
- Cuq J.-P. & I. Gruca (2002) : *Cours de didactique du français langue étrangère et seconde*, Grenoble,

PUG.

- Dubois J. et al. (1973) : *Dictionnaire de Linguistique*, Paris, Larousse. (『ラールース言語学用語辞典』(1980) : 伊藤晃, 木下光一他訳、大修館書店。)
- Goffman E. (1967) : *Interaction Ritual : Essays on face-to-face behavior*, New York, Pantheon Books.
- Kerbrat-Orecchioni C. (1992) : *Les interaction verbales*, t. II, Paris, Armand Collin.
- Kerbrat-Orecchioni C. (1994) : *Les interaction verbales*, t. III, Paris, Armand Collin.
- Kerbrat-Orecchioni C. (1996) : *La conversation*, Paris, Seuil.
- Kerbrat-Orecchioni C. (2005) : *Le discours en interaction*, Paris, Armand Collin.
- Kerbrat-Orecchioni C.(éds) (2011) : *S'adresser à autrui, Les formes nominales d'adresse en français*, Chambéry, Université de Savoie.
- 大塚陽子 (2008) : 「ポライトネス理論から見た言語行為—FFA 概念の導入をめぐる—」, 『言語・文学研究論集 第8号』, 白百合女子大学言語・文学研究センター。
- Perret D. (1968) : « Termes d'adresse et injures », *Cahiers de Lexicologie*, 12, 3-14.
- Perret D. (1970) : « Les appellatifs. Analyse lexicale et actes de parole ». *Langages* 17, 112-121.
- 曾我祐典 (2011) : 『中級フランス語 つたえる文法』, 白水社。
- Spencer-Oatey H. : *Culturally Speaking : Managing Rapport through Talk across Cultures*, London / New York, Continuum Publishing Company. (『異文化理解の語用論』(2004) : 浅羽亮一監修, 研究社。)
- 滝浦真人 (2008) : 『ポライトネス入門』, 研究社。
- 滝浦真人 (2013) : 『日本語は親しさを伝えられるか』, 岩波書店。
- Traverso V. (1999) : *L'analyse des conversations*, Paris, Nathan.

資料1 教科書における呼称の扱い(数は登場回数を示す)

人称名詞	MB	FED	DVV	CP	SF	EL	AE	NT	計
「名」のみ(発話冒頭、発話中)	8	6	16	2	5	6	2	3	48
質問+「名」	2	1	7	1	6	1	2	0	20
宛先明示のための「名」	1	0	5	0	0	0	6	0	12
Allô+「名」	0	0	1	0	1	2	2	0	6
話題転換、注意喚起+「名」	0	1	7	2	1	0	1	2	14
あいさつ+「名」	2	2	10	0	5	14	8	3	44
oui・non・応答+「名」	0	0	6	0	0	0	0	0	6
感謝+「名」	2	0	2	0	0	2	0	0	6
勧め・勧誘+「名」	0	0	7	0	1	0	0	0	8
命令・依頼+「名」	0	0	6	1	1	1	0	0	9
賞賛・祈願・祝意+「名」	0	1	6	0	0	0	0	0	7
謝罪+「名」	0	0	1	0	0	1	0	0	2
評価+「名」	0	0	3	0	0	0	0	0	3
提示+「名」	0	0	1	0	0	0	0	0	1
行動の表明+「名」	0	0	1	0	0	0	0	0	1
vous+「姓」のみ(電話)	1	0	0	0	0	0	0	0	1
「名・姓」敬称なし	0	0	0	0	1	0	2	0	3
あいさつ+「名・姓」	0	0	0	0	0	0	2	0	2
M/Mme/Mlle									274
M/Mme/Mlle(冒頭)	5	0	5	2	3	12	2	1	30
M/Mme/Mlle(手紙冒頭)	0	0	0	0	0	0	1	1	2
質問+M/Mme/Mlle	5	0	1	2	1	3	0	0	12
宛先明示のための M/Mme/Mlle	0	0	1	0	0	0	2	0	3
あいさつ+M/Mme/Mlle	9	1	8	3	3	46	0	5	75
oui・non・応答 + M/Mme/Mlle	14	2	10	1	0	13	0	1	41
感謝+M/Mme/Mlle	11	0	4	0	0	5	2	0	22
勧め+M/Mme/Mlle	0	0	2	0	0	0	0	0	2
命令・依頼・要求・禁止+M/Mme/Mlle	0	0	3	1	0	0	0	1	5
Pardon / Excusez-moi+M/Mme/Mlle	4	1	3	0	0	0	3	3	14
謝罪+M/Mme/Mlle	0	0	0	0	0	4	0	0	4
提示・提供 + M/Mme/Mlle	7	0	3	0	0	15	0	2	27
話題転換・注意喚起+M/Mme/Mlle	0	0	2	0	1	1	0	0	4
店員、従業員からの呼びかけ	1	0	1	0	0	1	0	0	3
M/Mme/Mlle+「姓」	1	0	0	0	1	3	0	0	5
宛先明示のための + M/Mme/Mlle+「姓」	0	0	0	0	2	0	0	0	2
質問+M/Mme/Mlle+「姓」	0	1	0	0	1	0	0	0	2
あいさつ+M/Mme/Mlle+「姓」	0	1	0	0	8	2	2	0	13
応答+M/Mme/Mlle+「姓」	0	2	1	0	0	0	0	0	3
要求、命令、指示+M/Mme/Mlle+「姓」	0	0	0	0	0	0	0	0	0
賞賛+M/Mme/Mlle+「姓」	0	0	0	0	1	0	0	0	1
謝罪+M/Mme/Mlle+「姓」	0	0	0	0	1	0	0	0	1
話題転換・注意喚起+M/Mme/Mlle+「姓」	0	0	0	0	0	1	0	0	1
M/Mme/Mlle+「名・姓」	2	0	0	0	0	0	0	0	2
称号									19
Docteur	5	7	1	0	0	0	0	0	13
M. le proviseur	1	0	0	0	0	0	0	0	1
M. l'agent	1	0	0	0	1	1	0	0	3
M. le directeur	0	0	2	0	0	0	0	0	2
職務・役目									6
chauffeur	1	0	0	0	0	0	0	0	1
garçon	2	0	1	0	0	1	0	0	4
taxi	0	0	1	0	0	0	0	0	1
家族関係									33
papa / maman	8	2	7	0	2	5	1	0	25
mon enfant / mes enfants	4	1	1	0	0	0	0	0	6
grand-mère	0	1	0	0	0	0	0	0	1
tante+「名」	0	0	0	0	0	0	1	0	1
友愛関係									10
cher(s) amis / Chère(s) amies	8	0	0	0	0	0	0	0	8
mon ami / mes amis	1	1	0	0	0	0	0	0	2
仕事・その他の関係									3
chers clients	0	0	0	0	0	0	1	0	1
tout le monde(職場)	0	0	0	0	1	0	0	0	1
patron	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ラベル									9
jeune homme	0	1	0	0	0	0	1	0	2
les jeunes	0	0	0	0	1	0	0	0	1
les enfants	0	0	1	0	2	1	0	0	4
les filles	0	0	0	0	0	0	1	1	2
情意語									13
Cher+「名」/ Chère+「名」	0	0	0	0	0	0	1	3	4
cher monsieur / chère madame	1	0	0	0	0	0	0	0	1
(mon) chéri / (ma) chérie	2	1	0	0	1	0	0	0	4
petit / petite+「名」	2	0	0	0	0	0	0	0	2
mon / ma pauvre+「名」	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ma vieille	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計	111	33	138	16	52	141	43	26	560